新局玉石童子訓

巻十二

八遠13
1277
27

1279
27

村田

新局王石童子訓巻之十二

東都　曲亭主人口授編次

第四十二回

家傳の刀子両善少年を留む
百金の證書同居の母子を裂く

童説大江杜四郎成勝ハ朱之介が射る一三の箭を拂ふ剽輕目覚く彼箭ハ既ふ盡一かゞ主客の勢ひ地を易て早くも射るふる隨ふ小盾を投棄ち弓箭を刺そ。射んとそ馬を找れば朱之介ハ心慌て悔く思へど今ゆらふ已ぶふあらざれば弓を搖遣り小盾を取て馬を東西ふ馳遣せて寄て組まく欲すれども杜四郎ハ人馬一致の奔蹄迅速自由と絶ぶ他と也も近づけど西へ走らば東ふ返して互ふ駈ら駈らる。鈴々たる鑣の音丁々たる蹄の響音。孰ふ暇るゝ馬ハ汗一人ハ疲る。末ハ憶ひまと来後れて。間程

よくるり〜かべ杜四郎八背さまふ身を反りて剽と射る弦音高く馬上の強弓朱之丈八小盾をとりて受けまくまふ何ぞ及ん鈍や右の肩尖を射られて骨中徹るまでふ疾く痛を忍び馬を回して避まくまる那時遅し杜四郎が身を二の箭ふ朱之丈八胸を射られて一聲呀と叫び果ぢ身を仰反りて馬上より下大地ふ揖と墜るかべ是を見る者堪ぎやありけん齊一吽と笑ひけり當下賀の伴當ら両個の鑣奴と共侶ふ東の集會所より遽しく走来る或い馬を牽駐め或い朱之丈のもと急て掖起さまく欲まるふ朱之丈八墜ける時馬ふ酷く踏れかべ速ち立も得ぢ苦痛を忍び聲振絞りて衆人さのみ俺を笑ひそ俺豈彼箭ふ射らるんや避んとまく謬て鐙を外して墜たるのみと鑣奴ら少も疑ぢ是見の人々の衣裳八胸ゆも肩ゆも桐灰粉ヨヨく塗まとれべ射られる迹分明へ卒立のへと窘めて肩ふ掖被卒くまく。

集會所へ以て去りけれべ猶這里ふ在る少年ら八朱之丈の口の少紀を憎こそ勧る者もるー开ゞ中ふヨヨ賀志賀丈八政賢八愁ふ親の吹挙まる朱之丈ゞ良の為体ふ且羞且腹八立とも然而在るべふ有らぎれ八伴の奴隷ふ吻咐て朱之丈を宿所ふ返さふ旅費力ある奴隷毎朱之丈を搭駝ゞヨヨ賀の宿所ふ送て被まふけれべ留守る老僕ら八朱之丈ふ貸て被まる戎装衣裳を脱易せて猛可ふ便轎ゆも載て吾足齋の宿所へと送遣りけれ八是を見る者のひとて偽へていふく胡慮ふ八ひけり是より先ふ高頼主八末大江の駅射果ー時左右ふ侍るヨヨ賀曲膳と高嶋石見丈を見久りて汝ら何と思ふ彼大江杜四郎峯張来六郎の槍棒弓馬八今日の試驚の花ら實之因て這里へ召ひて此の賞禄を取べ然れども又彼末朱之丈も翔鳥を射て隊千たる修錬を思へ凡庸る少年ゆゑ他ふ一倍せる成勝通能を

敵に向ふ者これ皆竟に後れを取つらん。他肩を並べんと然るに笑ふべき者なれども彼ヨヌ辯ふ者を慾を飾りて人を誣るが如に實に是憎むべし。當城内に壯佼多ぶ漫に他と交らび浮薄に成るもあるべらん。汝等よく信ずべし。今この後朱之次を城に出入を禁めんと理り切て諭さる。曲膳に甘ふ汗して仰畏るる兼て此の臣も彼朱之次を然る者と思ひ過して今日の試數に召俱ぶを後悔の外いなぶと陪話るを高頼主曰あぎ否汝を疎忽とぞ咎るゆあらぎかいでも為たるとゐがら。今戰國の最中に有れば一藝ある者を薦挙て君の役に立ちくまゐる臣さる者の職分に然ばとぞ其人毎に賢良の者のをあらんやを擇て用ると用ざると是も亦君に在る者の職分なり今よりの後朱之次に懲ぶ薦挙を宗とせよ。何に恥るとあらんやと最鷹揚る君命に曲膳に稍心ぶ畏りをぞ禀けける當下高頼主に又石見次を見久りて要る言ふ時もや程らん彼成勝と道能を又蚓く召れ。そがゝの次に石見次に阿と答て出て杜四郎と来たを。俱にて架屋に向かひ坐つかくと坐え上にかば高頼席を改めて件の西少年に對面あり且へらく憶に倍る汝等の武藝剽輕一人當千ぶ成勝に天飛鴈を射て墜せ時傷つけぎりて隻羽を縫に偶然るや然るあらでさるもその技を狩と問まて杜四郎頭を抬げて然に漢籍の例を思ひに鴈に素是信義の鳥に是をもく秋毎に来賓を德を諸侯に比らべる。その故に諸侯の贄に必鴈を執といふ。然れば今囚守の御意に從ひまゐて射て墜せ鴈をりとも殺て捉らんさまゐゆく形の如に仕りぬと言葉に陳かば高頼感悅大さるらぎ憶に膝を打鳴して然也々々宜定に然更汝に武藝のこゝろぎ文学も亦今の世に稀る才子とらいべ。今日よりて道能と共伴に予に仕へよ秩禄いとふに任せん諸國を遊歷ることかと連りに留めく

已ざりきを。杜四郎が何とぞるが応難く後方が伝る柒六を見えて。倶に合
稟をもう思ひ外なる御懇命を推辭まつるが無礼るとども臣もが素より情
願あるて。共が武者修行が生るが百里の路ともるで仕官を求むべ
くその義が免させぬくと。辭ふと高頼主ゆあぎ。開が然る故もあるべけども。
藝術未熟の者ならば武者修行まるるもあるん修錬の上ぬ要るの歟と
諭せども四郎柒六を従ふもあらざれヨヌ賀典膳高嶋石見共倍が膝を進
めて言語齊一説諭せども。杜四郎も柒六も只云云と固辭のを言果べもあ
らぬれば主君の後方が伝るる曾根見五郎平堪ぎやありけん。突然と進ま
出て杜四郎ものうち向ひて。名告を為て且のまう和殿もさるとの情強しいで
もあるとのがら我君が世々當國の大國主京都將軍家の御為が御後見で
とうもせば主君が取て不足があらでよりもるの虚辭退して。後悔をるものひそ

と挑むと柒六ぬあぎ。勃然として答るまう開いるるまうるるまう。人各情願
あり匹夫も志を奪ふべからず。已ぞも主僕の故郷が親ある。兄弟ある教が悖て。
他郷の君が仕へんやとしも果ぬ杜四郎が目を注せて推禁めて更が曲膳石見
が向ひて謹て稟まう。御諚が実が有がるまで辱くへども既が柒六が
稟まう如く。臣ぞが父兄の為が已がるよりもいへいで只ぬの儘が放ち遣せまうて
とて。願ひまうの外がなぞ。御縁竭ぎが異日又見参が入る日もあるべ。ぬの義宜
まう御執成をと辭ふと高頼主うも悔て。ぞらるが是非が及ぎ。抑面念が断
ぬ五郎平賞禄を取せと仰が五郎平阿と答て懐がぞうける目録二通を
出て卒とく遞與せば四郎柒六受戴るて別紙見るが近江布十反沙金五包。
大江杜四郎へとあり。柒六ぶ受うる目録も亦是が同じを巻收め懐がぞく倶が
恩を拜て出ぬ。小人毎が然せる功を。小るが是ぞもの賜を受なるかぞ

あぢ然らとて又辭ひまうさば不敬の罪と増やせん殆當惑仕り奴と謝まる高頼主うち是て然ざらん東西何欲あらん今日の武藝を賞まるのを尚此の地に所要あらば逗留に隨意なべし石見次も這意を汲て他郷へ立去まり先こもて予に報よ卒退らんとて立ぬ時ヨヌ賀典膳曽根見五郎平以下の近臣相從て俱て後堂へ赴く程に昌谷のよく傾て落て下晡に成りける當下杜四郎柒六も高嶋石見次と共伯に遽く架屋を出て土居て囲守を目送果て杜四郎に要あるとて見次の袂を曳て請ふて集會所へ退く程に試數の為に召されける少年達も皆次に去りぬ只高嶋の伴當と十餘箇の夫役もの残りて幕の外面に在りの餘人のみ残りぬ杜四郎に密やかに石見次に談ずるを聞て斯ぞ何とやらん面正しくもあるべきを郷高に在下憶らるく這腋挿の刀に附る刀子を失こ奴抑俺這両刀に昔天喜の年間鎮守府將軍源頼義朝臣の為に拵石の刀工が作る所青海波の三言銘あり其後

ヨヌくの春秋を歴て建久の年に成りけり我遠曽大江廣元に頼朝卿の賜りしと家の口碑に傳へしを父の遺書にて稍知りぬ刀子も亦同作なり小柄に則全百金の波濤に知鳥の高彫あれば紛ふべくもいざ身にも代ぐべき至寶なれば今日も亦腰に放さぬ口に畫飯を賜る時解て傍に置しのを折らん衆少年は徘徊夫役も ヨヌく立稠る混雑の中なりければ次無ところあらむぞ ん ぬ ぐ 我為其盗児を穿鑿てとりスーてのゆいねと怒めば又柒六も聲を低めて郷高に小可も推並ひて其傍に在りるべく毫も心づかるーに野狐の魅されけん面るくこそいふと共に咽く秘密の要事を石見次に列々と听果て嗟嘆に堪ぎ屢四下を見久りて現に安らぬ頼まぎともぞ伏に捨措くべきるに紀あらぎ暮るに程もるー知又此の處に長談の室にあるねば誘ひ宿所に退りて左にも右にも主張せんとて更に聲振立て伴當を召よせてのそく立べ杜四郎も

柒六も相従ふて宿所へいそぐこと程ふ。その日も果敢るく暮ゆけり。復説高嶋の宿所ゆ、主人も客も終日の疲労るにふあらざれば共ふ夕饌を果して後夜蚊帳房ふ入りしかど。杜四郎ハ今日失ひし刀子のゆくへふ思ひ悩ませ。思ひふ柒六も小横児を被ぎ向坐してうち譚ふ語次ふ柒六がいふ。今日稠人の中ゆとも刀子の失しハ怪あれふ猶怪あれい朱之次ゆ試覈みて隊ふ入りしのち其来歴を知らざるまゝ左ゆも右ゆもあらるがゝ。その形をもて推捉へく。敲くべ他奴ゆ竊盗て石と換玉ふ抓せしる。一百九十五金のゆくへさらへ刀子ゆ盗児をも知る所縁ふもやるべらん。とらへべ杜四郎黙頭てそ勿論のゆゆゆ我們ハ旅客ゆて權もるく威もるにふ人を捕へて罪を正さべ毛を吹て疵を求ふ似ゆ。只高嶋生ふのみ咀ひて告て彼人の意見ふ由るふあくとあらば咱憶ふ今見試覈ふ朱之次ハ東ふ在り。我們ハ西ふ在り。其間近くれば非除朱之次を責訂

もとも。百九十五金の外ふ彼盗児ハ知ぬがゝらん。然ハ思ひぬやと咱げば柒六ゆ有理と答て猶も餘談ふ及ぶ程ふ長ひ秋の夜更闌て丑三時候ふなゆ。俱ふ枕ふ就ひけり。然べ杜四郎と柒六ゆ其詰朝疾起ぬ。主人の身邊ふ人ゆとも。閑室ふ請迎へく。杜四郎ハ又刀子のゆくへさらへ云云とらハ。其資助と乞討ぬ。柒六ゆ又朱之次の旊舊悪の支の顛末彼百九十五金のゆ及財嚢ふ入換られる。両箇の小石の支ハさらへ九四郎の義侠淡泊の慈善其崖畧を説示して。思ふ通ふ咱ひ告れば石見次ハ驚ひゆ果て答るゆ已を昨宵終夜思按を旋したるけるふ彼刀子の盗児ハ必是外人ゆて衆少年九伴の奴隷扶然らぬ夫役ゆの所為ゆらん。と思ふのゆ何人と指を證据をゆ。ぐれば是も亦雲を抓み風を追ふよゆ果敢るかるべ間猜ゆ因て又思ふ。彼刀子の盗児ハ必人ふ沽却して錢ふ換るゆでゆらむゆらん。倘果してゆらん

杜四郎栄六郎
高頼小謁
高より
志賀次
てん蔵
倭大郎
きん弥

石見次
五郎平
ゆり四郎
うめ

あり。夜々城外に立出て或い典物舗骨董店を渉猟し、問も訂さず見出さんともあるべくんば是より外に出せん銀を知らず人来朱之介の旧知なる舊悪形の如くなりとも其金子に識るくい叩に捉へて責問ふべし。且他の乾児吾足齋い當家の權臣ヨヲ賀典膳の宿所に出入する者なりと人伝に聞ふ。遮莫典膳親子に思慮ある老実家なれば貝賜肩の沙汰を做さ者なられど。證据もなく朱之介の旧悪を訴かなる。裕と云恰と云夏皆難義に成ぬ。猶又再思あるべしとの最正首なる密談に来六なるものあり。杜四郎欽兼て御示教宜敷其理あり。彼百九十五金の内当時九四郎が償ふ其内中なる一百金を落葉に還したるければ。なるべく崇らざるもあらぬべし。只もう困ふ為かなれば我家傳の刀子なり。芳意に儘せて今宵より街衢に出て渉猟て。と答る間に老僕が来て御客あり。と告しかば石見介急に見えて誰そと問へ。別人ならば曽根見五郎平宗玄が昨日守高頼、王より杜四郎来六に賜りたる沙金十包と白布を吊台に載奴隷に舁せて。みづから案内来ぬるなり。是に石見介は遽しく退て衣裳を更るどまる程に杜四郎と来六も袴を穿て共侶に客房に出て對面を送の口誼言果て五郎平と又杜四郎と来六に向て。昨日は不慮に君邊を論辯過言に及びを後悔の外いなし。必る介意あらじ。就て其折寡君より両兄に贈りぬべせし二種を贋したりと。人間に若黨多ば。玄関より運び来る。四箇の有脚の大折敷に分ち載る沙金十包と白布二十反を處狹きまで置並れば四郎来六額衝兼て言語齊一答るなり。武藝に家業の多るに功あらぬしして恩賞を受まつるべくもあらねども。推辭禀さば不敬とのいはんに異日又好絶をもて禀上るよもあるべし。這義宜く御兼を頼まるるふなりと云其語を接て石見介

も五郎平は謝して云ふ。今日の一義は宰領の走卒のみにあるべきは貴所の光臨當りがたく。已も程なく出仕して御恩を拜したまるべしと云ふ五郎平否咱ら大江山峯張の両才子は送別を兼ねるべき幾比立去ぬべきやと問れく杜四郎然しは仕官を辭ひまるべし上は蚊く去まく思ひは爭何せん已が云要緊のみ出来りかば猶又時日を異るまでは長逗留ふるべき狩料りがたくいと云ふ五郎平領して开を左も右ものみるべし其日定らば高嶋主疾なれば上のべり暇まうもと身を起をと石見次椎禁めて猛可のみにて儲るけれども薄茶一服まゐらせんとふもあ笑りで刀を曳とにて天ふくいへども知らず如く多勢ゐるとべ異日推参仕らんと推辭て立出るを四郎柒六石見次も丟関まで是を送りて異口同様は労ひけり。かて杜四郎ぬい主人と倶は退出で悄やかは談まるべう豫心と知られ如く仕へぎして去まく欲まる。我们ばいかは

まで這賜を受られ。おそらの儘は藏め置て異日の地を立去るの後宝庫は返して玉ひねと憑めば石見次沈吟で开を暫難義の役ぞ。志ある者は孰もかくこそあるべけれ。ちろ彩てこそ件の沙金白布を長櫃は寄こ母。ゐ親封して舁せて土庫へ遣して其身は若黨奴隷を拔て君所へ出仕まるける是日長橋倭太郎勢恭象船等弥知量は大江杜四郎峯張柒六の試數の勝を賀せんと。石見次の弟子もと共侶は高嶋の宿所は歩はければ件の大江峯張は猶逗留まと少知ぶく欽ぶと大々ゐるまで是よりの後間く時る。参来く討論まゐは程はヨ賀志賀次政賢も早晩其隊は入りて交り浅うもるりはけ。然は杜四郎柒六も書こそ交遊の為は暇るけまエ夜は訪来る人のあらねば出く彼刀子と赤ねまく欲まれば石見次も安内の為は倶は微服まで夜毎は城外は

立出でゝ市に閲する程に秋盡て霜寒し十月の中浣に成ぬ。
いまだ便りを得ざりける休題再説。末朱之介晴賢は那日大江杜四郎が
射て落されて落馬あり。馬に踏まれ腰骨を損ずるのみならず初峯張
楽六に習学槍りて衝まれ時の撲傷も一度に發りて胸痛み身は氈
裏にて堪がたもあらざりしを。ヨヌ賀の奴隷の吩咐られて。开ぐ俣輻まち載て
宿所に送り来れば。母の阿夏の老芋いさらん。无四郎の吾足齋もあるらに。
と驚き惑ひて夫婦右より左より。俣輻る朱之介を扶出し。躰く小子
舎に臥せて事の顛末を問まくまるに朱之介口嘯くのみ言詳ならざりぬ。
五吾足齋已にを得ぬ。ヨヌ賀の奴隷を労ひて朱之介が怪我あるを。支の首尾を
詰まば奴隷毎に秘まふ。ゝ彼大江杜四郎峯張楽六の射藝槍法。衆に
秀でを朱之介が懲ぜまに二度まで試撃まを乞ひ。槍に弓ゆもち負て果に大

江の瓢箪に射て落されて馬に踏れ。其事の光景をかつ〻る仮に説示して
告別あり外に出て二人に空俣輻を拾起し。一人に又箱挑燈の蠟燭を接更て
城内へかゝり去りぬ。吾足齋老芋の俱に呆れ且腹立しさに朱之介の生兵
法に怪我の基なと呟くのみ。晩稲に又始より朱之介の調戯を快からぬ思へば
や。納戸に在りて出ても朱に然りとて已に死のみならず孤が吾足齋に膏薬を食せく
朱之介の痛處に布るとなる程に老芋に方僅良人の取らず。湯液を忘に煎
果して朱之介に薦めけり。小程に吾足齋に次の日ヨヌ賀の宿所に死て。昨日
衆少年の試撃の折朱之介を汲引せらるゝ歡びと喜ぶべく事の首尾を
も問んとそ。此の人情を懐かゝ。朝疾出て観音寺の城に入らまくまる程に
守門の城兵推禁めて。且いまに。汝に吾足齋延明るまぬ。昨宵守より御
下知あり。汝の乾児末朱之介に入らるも。吾足齋とも當城内へ出入を

禁めよと仰付られけるに入らまく思ふ大胆なり。疾らるゝぞと。君れば五呂足齋敬篤して。并々何の狡知ら孤ども。咱ち犯さー罪あらざるとヨヌ賀大人を知らせのうめいうぐ彼大人に五呂足齋が参りあれと。告ゆつらば尼繹て召入まらるゝわそあらむぎらんいうぐ彼大人の御宿所へものよーを告ゆいねと口説城兵等あぐ。黙まそい島尉に禁門の一條ヨヌ賀殿より徇らまーに五呂足齋が推参あく追ども去らぎと報亨さい捌捕まとあそのいるべけれ然でも去らぎ。かへらぎやと敦圍るぐらそり立て權威の捍棒搔合る又蝕く打拂ハまくまそけまば五呂足齋い吐嗟とだるに怕慌て逃る時麁石の稜に跌て。忽地撞と輾びーかば城兵等い堪難て齊一吆と笑ひけり既にーく五呂足齋い膝頭を搨破り。疼痛に勝ねば唾を塗く。隻脚を曳く城下る。已が宿所に帰り。生平のあらゆる聲高やくに老苧を屢喚近つけ。

鄉高に城兵に向ふ〳〵。那里の不首尾箇様々々と具に告て又公等畢竟い朱之仆ば愁るとと做ーても負ど魂懲ぎまに好らぬ口を唖ふけん。守ぐらるりヨヌ賀殿に憎まぎそ。いふーて罪もるに俺さへに禁門の出示に逢んやかるべーと知るよりもるく。晩稲の面瘡愈果くれば始より猶美ーく。るりにーの那里へ等そ又婚姻を誂せられん媒人の来よかーと其方の天を仰ぐまで日毎に俟ーい空憑めく。心銑然の琴の緒よりも果敢るく断れーえんのいる結ぶよーなくるり果ーい皆是彼奴ば所為るらぎやと。席薦を高く腹立聲に外の等えを亡れる然ーも良人の空憤を老苧るぐに胸苦ーくて。俱に額を痺まるのを又ぐ。うーもるるりけり。折ら晩稲い納戸に在る。親の高聲等知りそ。涙い袖にふるの雨まるに志賀火と絶ー縁ーい我唐崎さに世にーなる罪障の報るる狡。とうち歎く。壁に對ひて吻く息の

生雲八重垣まぐ見ぬ夫と絶し縁を復結ぶ神るー月も恐めく思ふ小春の空櫻脆ち風の怒るべ。是よりの後五日足齋い城内ふ病架あらぎなりて。玄関寂しくるりーかど町家ふ猶芽を乞ふ得意るたふあらざるとハ日毎ふ出て。朱之丈を見久らぎ。晩稲も亦枕方ふ立よるとただふ戮ふの故ふ只ハ難面て他ど安否を。知らぎ白ゆて問絃ども。母の老苧ハ骨肉の恩愛ふ羈されて。夜ふ日ふ看とりて粥を薦め。獨朱之丈の為ふ。膏芽を貼昏湯藥を煎じて。暇もあらぎ立掙けばいと短。初冬の日景を已ど為ふのみ猶短ーと思ひけり。亦程ふ朱之丈ハ病臥二三十日ゆて。撲傷ハ餘波るく癒り果ーかど。吾足齋ふ疾視らぎ呟るど腹立ちさふそど儘臥て在る程ふ十月望ち日ふ。るり丈信朝五足齋ハ西東る病架ふ招ぎて。宿所ふ在らねば朱之丈ハ折こそよけれと。起出て。蒲團掻遣り口漱ぐて。母の身邊へ歩ふけるを。何夏の

老苧ハ見久るて。珠よ疼痛ハ甚麽ぞと。始より七三飡ハ生平ふ異ふらざれば。痩ぐふ見えぎ。最芽出ーとるをば。ゆるぞ高胡坐髯搔拊て喃奶々撲傷の愈ーハ今日のみかハ五日も六日も前日より。起も出まく思ひーかども。阿父耶ふ面を見らぎるば。晩着らぎ燻されく。耳置く堪ぐからんふ。晩稲ぎら一向ハ何ぞの腹の立やらん。のえ泊ぐで。皓々と目を仄るど心悪さふ。今日ぎで臥釋迦で在ぎーかども。幾ぎぐら斯てあるべき。髪を結ぎ湯ふも浴てん。俗ふ云ふ木葉落ーぎて。朝夕ハ最寒かるふ。ぎぐ刺被の沙汰もあらぎ。ぎの容ぎて何處へ出らぎん。殘れ衣ぎれ貸ぎれ。身裝して暇亶ぎん他人ふ劣る這里のみふ日の照るりの狡と喧嘩の紙鮮を老苧ハ少あ人ぎ復しても横道児鴉ハ口ふ悪ぎるく。人の謡ふと思ハぎ。爰々ハ何とも宜ねども。咀敗衣を解洗ひて。綿衣ハ疾ふ出ぎ。是被て出て来よかーとるく立く

竹櫃る陸奥太織の絮腸衣と共ゆ金を鏹百銭を卒とそ賦て取
まれば朱之父いよも見ぎ開がもく傍ゆ図ぐ。南奴々思ひ立日ゞ吉日と世の
常言ゆもゆ乳ば今日より他處ゆ巣を易て邪悪の宿を解脱せん。就て阿
爺ゆ預ける。枸神の代金百両を目今出ーぬひね。とゆ老芋ゆ沙あぎ。
開ゆ亦思ひげるゆ始爺々の教訓を。你ハ何と聞くるゆ非如枸神の
即效宅。晩稲の面瘡愈ゆりとも。你の為ゆ女ハ弟品大人とい義理ある親子
るるゆ。他人ゆく差盤立て貸借とゆるかハと詞を志迫ゆく窘るを朱之
父ハ冷ゆ笑ひて開ゆらるるゆ親子間でも銭財ゆハ言品出来て後竟ゆ。
愛を失ふゆ世ゆヨスるゆ。ん身とそ我母るゆ阿爺ハ素是他人とそ思ゆく
義ゆあらぬ邂逅環會ゆたれどそ乾父面ーそ宿せるれど犬猫でも喫でハ
あらぬ絞ゆ三さびの乾苽飯の外ゆハ何糧る例ゆ。そを見做ふてゆ晩

稲ゆそ傲慢高上る無愛想漂致自慢狄知ら孫ども。己甲斐なければ何
ゆも。時世と辛防ゆれども。今日ハ行莵の駝貸ゆ枸神の價を還ゆねと漸ゆ
蓑る高聲ゆ老芋ゆも亦動とゆそ。ゆらせて図ば不敵の本性親を親とハ思ハぬ
や。昔年周防の山口ゆそ。兄四郎殿ゆ逢ざりせば。你ハさらゆ我身ゆら辛ゆ浮
世ゆ堪難て塩焼く浦の煙ゆとも。ゆりなんめを彼大人の好意ゆゆそ伴れ你ハ
京師ゆ留りそ。西様中納言兼頭卿ゆ召置れ我身ハ単陸奥へ行くゆるまたれば。
富まぬゆ。人並ゆ世を渡来ゆるを恩ゆ。義ゆ。とゆるまんゆ。況銭財の
ゆハ者。大人のゆ。ゆ出納ゆ。奴家ゆ任せ。今百両とゆ金の有やゆ
ハ知らねども。縦財禄ありとも。そを朱之父ゆ取せゆれと。咽口親ゆ。ゆ
や。鳥滸ゆ。ゆと敦圍くを。朱之父呵々とゆ笑ひく。そをゆ。ゆ昔
年周防の山口ゆそ我們親子の窮阨を救ひ。今の阿爺の肚ゆ計較

あることをそ。あん身ふ惑ひ一以所るとべ因ゆあらぞ義でいるゑ。あん身も亦余そか。天も地も只一個る子を葉て去れ一藪の下の別をを思へ世間ふ慈悲ある親の心と異ゑ骨肉でさら八九年音信不通で過されふ素他人る今の阿爺が乾父滋ふ金百両を踏ちくまるとも取らで已んや一も入らぞ二も入らぞ。藪の花餅より大なる印判押て渡されー彼百両のる實茲ふあり是見ゑ。と懐るる鼻紙の間より彼一通を含出て皺を伸まうち開て是ぞ。うち嗅て可買取藥種の事。枸神一枚價直金百両也。右於即效有之者明十七日金子無遅滞可渡之候為後照る實仍如件。享禄三年八月十六日吾足齋延明印。旅人朱之丈丈保人宿六丈と讀訖て。嘺奴々阿爺ハ宿ふ在らぞとも。かだろ正一紀證據あるとべ。這一通と交易ふあん身彼百両を。咀ふ遞與ゆふとも。阿爺ハ言品ゑ

るべ。這照文ゲめをいべるう。あん身ハ知らぞと宜へども。阿爺ふ財禄ヨヨうふ。とも。そを秘措るく處まぞ。咀ふハ先刻猜ーなり是欲からぞ。と賣弄まる。て實を老芋ハ撮含て見ゑ。熟辣哩と引裂衣葉れ朱之丈ハ吐嗟とだろふ。駭慌く禁むとども及べくもあらぞれハ。勃然とて怒ふ堪ぞ眼を瞋ら一聲苛立て。奴々ハ狂女狩乱心狩苟且るら百金のる実を引裂衣葉られて親子ゑとて許さえや。と罵る面色凄ぞを老芋ハ見る目ふ涙滑て不ロ狂乱もせぞ。件の金を惜ぞ儆ぞー事るられども。始你を珠之丈と知らで爺々の渡ぞ。ゆハー。這る実のある故ふ。親を親とー思ハざる蓬ぞ你の大慾心を隠直さんとて引裂衣葉ゑ。非如今其百金を生て你ふ取るとも有る時ハ有るふ信せぞ。湯水の如くふ使ひ葉ゆる。金ハ其身の怨家るとぞ。知らで欲まる愚さよ。是ふ就て思ひ出ぞ初你の生まー時奇ぞのゑヨヨうければ賣ト翁ハ

問試ありて其折寫ておきされ。ト書一通茲にあり。そは漢字ゆえ讀れぬも。要あるべしと思ひしかば。躰て你の腰吊の護身嚢に秘置しかど。佛生山に在りし比失きやせんと思ひ久しく。移して我身の神符嚢に藏め置とはいへど。幾層の年を歴ぬるまで故の隨ゆえ今尚ゆ。是先讀て呉せよとにを懐抱の嚢より其一通を倉出て。卒と渡せば朱之仗はやうやくに怒氣を治めて。黙然と又死るゆを解かで其ト書を倉上て讀程に老苧は膝を進めて聴けば其文にいへらく。子而非子非親是親。一窮一達因果輪々。五回の見元宮とあり。朱之仗は両立番讀復しかもうるを聞ば眉を顰めて。嘯奴々云最解し易かれども親にあらぬを是親とは我身に實父の外に乾父なる者三四名あり。周防の叔々も其中なれば其頭なるにあらずや。向に老苧は沈吟して今思ひ合しなれば周防なる叔々の子ど你の上をいふべし。一窮一達云云と

あるは今こそ困窮されて後に望を達する日のありといふト定の隱語ゆえあらむぞらめ倘果して山口なれ三石なれば叔々に再會の打其ト書を見せまゐらせなば必ず愛敬びて必資助にあらんか然ば今枸神の價の百金を倍て幸ヨメるべし。左ても右ても這家に同居せずと思ひ定めを留るにあらん。我ども爺々は今日或病架の床徹の壽祝に招ばれて小夜深て遅く侯。寝りねと今朝宣へせよ。日景も午に過るに明日立去るとも我身も今は何だりの遊財にあれども去歳の冬陸奥なる信夫の郷を立去る時今は要なる髪の飾りとて花やぐる衣をんどを活却して金子四五両あり。汝の盤纏に取せんと。卒とて躰く身を起して納戸へ入るを影護晩稲に少れど見られじと思ふまろの安らねば我物なれば盜むが如く圓金五両を出し歩。紙に拓りて朱之仗に渡せを楚と受取て其の五枚に百両の

手實を證わして朱之介母わ百金を徵む

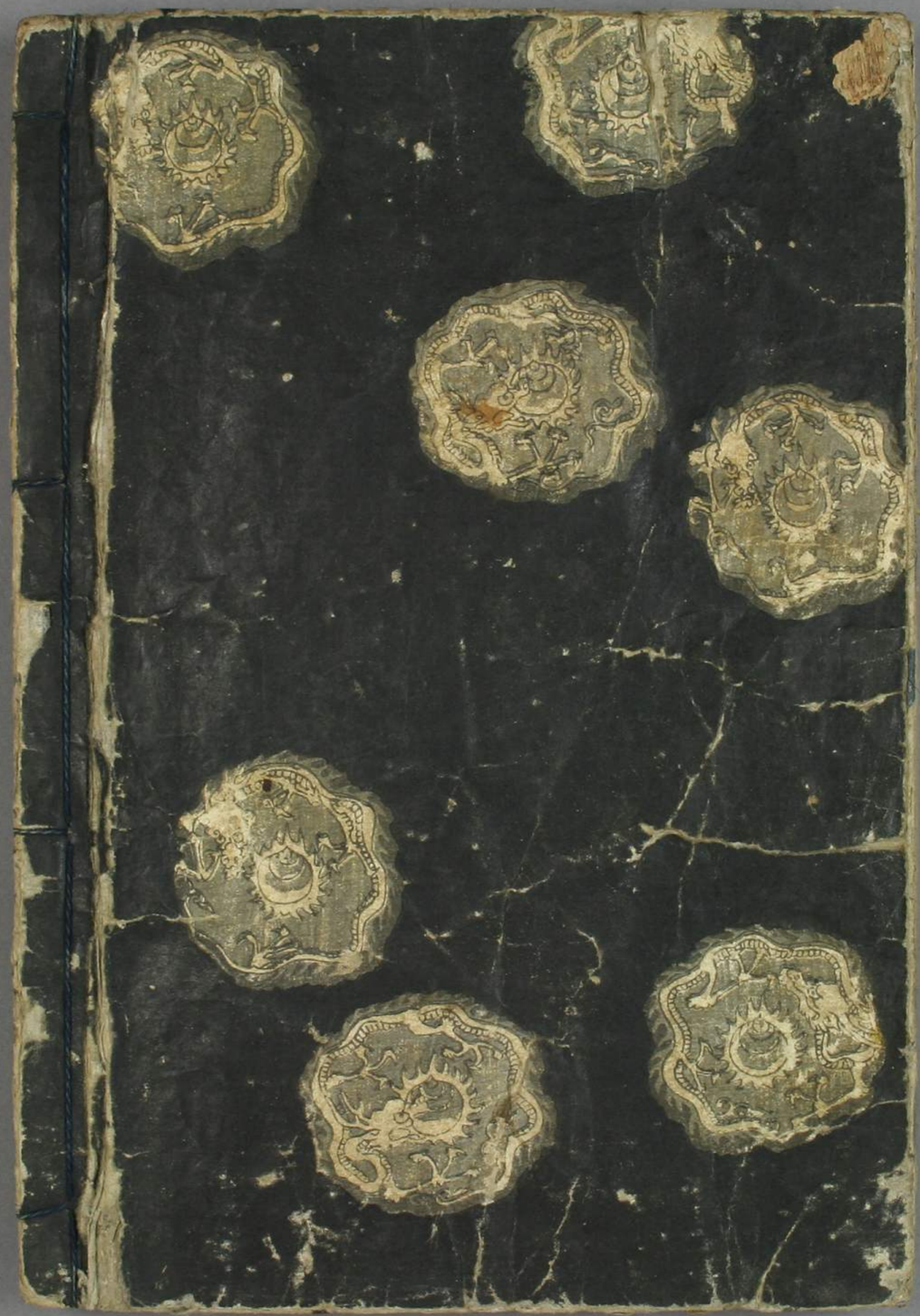
一割ふゞも足らねども。るゑ虫ふ優べ。罪ふりそん今より浴ー結髪ゑして。枸杞村
る宿六許訪ふそ那里ふ一宿明ーそ。碧昔起行ふそ便宜ふ依れ。阿爺の還
さを候着て。愁ふ告別せゞ。復も口吉の起りゑせそん。身代りそ左も右も宜く
亭ーゆゑ。とゝゑて衣と脱更て。豫准備の長財嚢ふ金子いさらえト書
さへ銭さへ藏めて。腹ふ纏締外ふ敗衣敗脚袢。踏皮も一緒ふ推圓ゆそ。
袱ふ包るゞとも。菅ゑまでも送るゞ。揃へても東西足らゞ。腰ふ短ゑ逆旅
刀さて。往方ふ定めるゑ。雲と水との別路ふ。老苧ふ餘波惜まれ。涙と共ふ
そめるゞ。只獨子を放遣る。憂ふ浮世の習そと思絶ても又あゝの。何時と知
らねゞ堪難ー。涙うち啞て送別。聲曇らゑ。夜よ珠よ。周防いさらえ那里まれ。
落着地方と。ゆる日ふ。文蛛く便と。ゆせよか。夜よ喃々と。諄返まと。朱之介ふ
応へのこまそ。袱包ゑ笠草履。両ふ引提て。玄関より。いそゞく出てゆゑけり。是

日晩稲ふ已の時。候より。頭痛さとゝく。納戸ふ在り。寝とゝるふ横臥て。枕ふ
就て在りー。程母の老苧と。朱之介の密談を。洩ゞかと。起出ん。さまゞゆそ。
故の儘そ在りける程ふ。何夏の老苧ふ。玄関ふ朱之介を目送果ても。晩稲ふ起て
出ても来ず。他ふ出ずふ。ゆるん。と思ひゝ。奥ふ入る。折ゝ思ひかけるゞ。五日足齋
ゞ。かゝ来て。坐席ふ在り。老苧ふ驚ゑ。且訝りそ。ゆん身ふ今宵云云ゆゞ。深け
ずふ還りかゝるべー。と宣ふせーふ。誰何そや。生平よりも。最早ゆゑ。とゝゑて。吾
足齋然ゞと。今日十々。綿屋の床徹の賀席ふ招れゞゆ。祝ふゞ。此の人情を。
齎せずふゆるべゝ。と。方僅心つゑーかゞ。そを整ん為ふのゑ。背ふ。より。夜ふ来ふける
ゆ。俗と。又彼珠ゞ。長河谷の顛末を。ゆとゝるゆ。聞知て。呆ゑも。あゝ。腹を
立ども。圍坐ふ入らゞ。妙るゞ。と思ひゝ。久へて。躁ゑゞ。在り。彼奴ゞ。出て。ゆゞ。背
影を見ゝ。顕れ出るゝ。斯いゞ。何とゆん。無慈悲ゆゝ。似ども。破落戸と

知りるぐらう珠之丈と留置直ふ後竟ふ親の首ふ縄を掛るとるうぐそと思へぐろ
安ぐうぐりふ彼奴ぐ猛可ふ辭去りふ我と仏の尼嬢ふ是より迚化直るべ。
就中彼柏神の百両の実を引刻裂棄くる。雄ぐ紀仏の掙紀ふ誉るゆも猶あま
とあり。適吾足ぐ妻ぐ哉とられて老芋ふ甘苦笑ひて。原来言甚皆ぐれかけ血を分
たる親子でも彼百金の情由あれぐ出て伝ふ猛可ふ他ぐ辭去
ぐーふ手ふ伝り。とふ間ふ納戸より晩稲ふ徐ふ出て来ぐ。答さ丈と尋ぐ一旅と問ぐ
母の後邊ふ居るを老芋ふ言ふ見ぐ。晩稲頭痛ふ痛ぐ一旅仏ふ言ぐ告
ぐ紀朱之丈ふ云云とふを五足齋推禁ゆ。彼奴ふ生涯未ぎもあと養老小
孃の晩稲ぐふ恙もるふ我仏夫婦ふ左園扇で百年までも樂隠居とやいる
べぐうん其ふ頭の餘談ふ後ふ。彼進物と何まれ彼まれ見繕ふて出さぎ。且短
きふ。とふそぎ。老芋ふ那這撥拶りて。稍合る出を堅魚脯を三旅五旅推裏む。

陸奥紙ふ楮線撚て。縹題字を走筆。そを編絹袱ふ重裏して卒とそ
渡を五足齋ふ受取ぐ得と見て是で好。これでよ。今朝ぐもひーるぐ。
今宵我かへさの遅くふ前後都てよく鎖して。寝まりて敵くを。侯ぐ。
々も刀の璫衝立て身を起ふ。憂ぐ一ぐ背門より出てあぐ。仏程ふ朱之丈ふ腹ふ
計較むよりあれぐ猛可ふ母ふ別を告て立去りてもまぐ遠くふ巷頭ぐ銭浴
室ふて浴ぐ。鬼頭店ふ立よりて。結髪を程ふ肚裡ふ又思ふ往る比
城内ふて。試驗の折ふ思ひかけぐ。九四郎の弟ぐ。朱六奴を敵ぐふ。
彼奴ぐ口より我舊悪を漏さぐ人ふ知られやせん。支の破ふ至ふ奴先ふ。
ぐと。豫ぐ。思ぐふ。あらねども。柏神の價百両金を取らでいるんいさぐて。
母と債揮ふ甲斐もぐ。絶ふ五両と餞別ふ當類まてれぐと。西國まぐの盤
纏いさぐ。小使料ゆも春の雪程なく消てあらぐ。商量敵ふ足ら

ぞとも。先宿六許赴いて立てる腹を横ふまるまで氣を轉じてとそ左も右も去て向を定るふまくとあらじと深念をまろく其前面る酒肆ふて酒一斗を小鐏ふ篩せて酒菜さへ二三種買とりまを秋包と一荷ふまそやをら肩ふうち被て柏村を投ていそぐ程ふ下晡ふるりふけり既ゆて朱之丞が柏村ふ来ふけれ共まぐ見も忘れ故宿六の門より裏面を刺窺て宿六便へ宿所ふ在秋珠之丞が来りるぞと両三番呼門へば応と答へて敗紙戸の走難るを左右して推開て主人迎まをと見れば宿六ふあらぎして年二十五六なる一箇の壮佼面の色黒くして彼漆の芦笥の如く身材高くして廣院の金剛ふ似るが横編るる方袖の綿衣の申ん時可るるを被て柿色の故りたる細布を帯ふまち破れて大指の顕るる官緑の刺踏皮を穿て背の風を児を撥るぐ奥より出て来ぬる。此い是何人ぞや。汗を下回ふ解分るを聴ん。

新局玉石童子訓巻之十二終

村田